

熱帯の有用材 (28)

緒 方 健

オベチェ (Obéché) 学名: *Triplochiton scleroxylon* K. Schum.

(アオギリ科)

オベチェはシエラレオネからザイールにいたる熱帯西アフリカの樹木で、一定期間乾季のある湿潤落葉林に最も多くみられる。パイオニア樹種の一つで、伐採跡地、道路沿いなどの開けた場所に、しばしば固まって生育し二次林を形成するが、閉鎖した天然林や常緑林ではほとんどみられなくなる。木材の主産地はリベリア、コートディヴォアール、ガーナ、ナイジェリア、カメルーン西部で、ナイジェリア地方名のオベチェのほか、アバチ (Abachi: コートディヴォアール, ナイジェリア), サンバ (Samba: コートディヴォアール), ワワ (Wawa: ガーナ), アヨウス (Ayous: ガボン, カメルーン) なども木材の取引名としてよく知られている。また African Whitewood, African Maple (ただしほんとうの Maple=カエデとは無縁) なども市場名として用いられることがある。この他の地方名としては Ofa (コートディヴォアール), Obechi または Arere (ナイジェリア) などがある。なお学名の *triplochiton* は“三重のシャツ”の意, *scleroxylon* は“硬い材”の意のギリシャ語で、それぞれ花および材の特徴を示すものとしてつけられたが、後者については、オベチェの材は軟らかく、これは命名者 Schumann の誤りである。

樹木の形状: 樹高 55 (~65) m, 直径 1.2 (~2) m, 枝下高 30 (~40) m に達する大高木。樹幹は通直で、円筒状またはやや角ばり、下部に大きい板根がある。葉は乾季に一時落葉する。樹皮は灰色~黄褐色、ほぼ平滑で、薄片状に剥げる。樹皮の切口は淡黄褐色で、材には注意するとリップルマークがみられる。葉は長さ 7~15 cm, 幅 10~20 cm の単葉で、特徴的に掌状に 5 (~7) 裂する。心脚、無毛、葉柄は 3~7 cm。花序は長さ約 10 cm の円錐花序で、星状毛がある。花は径 1~1.5 cm, 桃白色で、萼片および花弁各 5, 雄ずい 30~40。果実は 1~5 個の翼果 (分果) からなり、翼果の室部は長さ 2 cm, 幅 1 cm ほどの平らな楕円形で、長さ約 4 cm の翼をもつ。

木材の特徴: 辺材と心材の区別は不明で、一様な淡黄白色~淡黄褐色を示し、古い材は黄色味が強い。木理は通直~やや交錯する。肌目の精粗は中庸~やや粗。気乾比重 0.38 (0.30~0.50) で軽軟。顕微鏡的な特徴としては、道管は孤立するものと半径方向に 2~3 (~5) 個複合するものからなり、前者の割合が高い。分布数は 2~5/mm²。孤立管孔の最大径は 210~280 μm。道管の穿孔は単穿孔。道管相互壁孔は交互壁孔で、径 6~8 μm。道管放射組織間壁孔は道管相互壁孔に似る。放射組織は異性 III (~II) 型で両端に 1 (~3)

OGATA, Ken: Useful Timbers in the Tropics (28) Obéché
農林水産省森林総合研究所東北支所

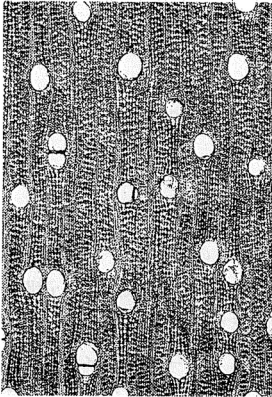


写真-1 *T. scleroxylon*
木口面 (16×)

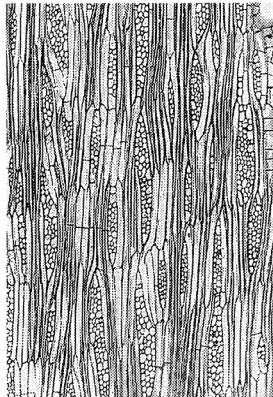


写真-2 同
板目面 (40×)

個の直立細胞がある。1～8列で、1～5,6列の場合が多く、1～3の少数列のものは少ない。高さは250～1,300 μm程度。放射組織にはPterospERM型のタイル細胞が存在するのが著しい特徴で、よい識別拠点となる。軸方向柔組織はひじょうに多く、木口で見ると放射組織と繊維の間に細かく散在状あるいは短線状に分布し、

軽軟な木材をうみ出す元となっている。紡錘系柔細胞が多く存在するのも特徴のひとつである。すべての要素が層階状配列をなしているが、放射組織の場合、約300 μmを基本単位として、倍数毎の高さの異なる層階状配列がみられる。放射組織および軸方向柔組織に孤立した結晶が存在する。シリカは含まない。

木材の加工性としては、乾燥は速く、狂いは少ない。白色・軽軟材なので菌、昆虫に犯されやすく、とくに辺材は青変菌が入りやすいので速やかな乾燥が必要である。乾燥後の寸法安定性は良好。強度は比重の低い割には大きい、強度を要する構造用材には不適切である。材が軽軟なので、切削加工は容易だが、鋭利な工具を用いる必要があり、釘打ちは一般には接着剤を併用した方がよい。接着性、塗装性も良好で、問題がない。大径材ではふつう中心に脆心がある。

オベチェは軽軟で加工が容易なこと、大径材がまとまって得やすいこと、欠点が少ないこと、価格が安いことなどから、とくにヨーロッパで合・単板、実用家具、屋内造作、箱類などに広く用いられる。この点カンラン科のオクメ (*Aucoumea klaineana* Pierre, 本誌 No. 2 参照) に似るが、オクメより色が淡く、一般により軽軟である。

このほかのアオギリ科の樹種については、ニアンゴン (Niangan: *Tarrietia utilis* (Sprague) Sprague; Syn.: *Heritiera utilis* (Sprague) Sprague) にも簡単にふれておきたい。ニアンゴンはシエラレオネからガボンにかけての西アフリカ熱帯降雨林に生育する樹木で、樹高35～40 m、直径70～100 cmになる。心材は濃褐色、木理は一般に著しく交錯し、肌目は粗。気乾比重0.68～0.72。

ニアンゴンは木の大きさや材質からそれほどとりたてていう樹木ではないが、ある程度まとまって得られること、東南アジアにいくつかの同属の種類がありわが国にもなじみがあること、材価が比較的安価であること、材質がワランの代替として通用することなどから、ときに(とくにラワン材の高騰時)わが国に輸入される。